

【B年】聖霊降臨節第9主日(2022年7月31日)

【旧約聖書日課】サムエル記上17章(32~37節)38~50節

³²ダビデはサウルに言った。「あの男のことで、だれも気を落としてはなりません。僕が行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」³³サウルはダビデに答えた。「お前が出てあのペリシテ人と戦うことなどできはしまい。お前は少年だし、向こうは少年のときから戦士だ。」³⁴しかし、ダビデは言った。「僕は、父の羊を飼う者です。獅子や熊が出て来て群れの中から羊を奪い取るがあります。³⁵そのときには、追いかけて打ちかかり、その口から羊を取り戻します。向かって来れば、たてがみをつかみ、打ち殺してしまいます。³⁶わたしは獅子も熊も倒してきたのですから、あの無割礼のペリシテ人もそれらの獣の一匹のようにしてみせましょう。彼は生ける神の戦列に挑戦したのですから。」³⁷ダビデは更に言った。「獅子の手、熊の手からわたしを守ってくださった主は、あのペリシテ人の手からも、わたしを守ってくださるにちがひありません。」サウルはダビデに言った。「行くがよい。主がお前と共におられるように。」³⁸サウルは、ダビデに自分の装束を着せた。彼の頭に青銅の兜をのせ、身には鎧を着けさせた。³⁹ダビデは、その装束の上にサウルの剣を帯びて歩いてみた。だが、彼はこれらのものに慣れていなかった。ダビデはサウルに言った。「こんなものを着たのでは、歩くこともできません。慣れていませんから。」ダビデはそれらを脱ぎ去り、⁴⁰自分の杖を手に取ると、川岸から滑らかな石を五つ選び、身に着けていた羊飼いの投石袋に入れ、石投げ紐を手にして、あのペリシテ人に向かって行った。

⁴¹ペリシテ人は、盾持ちを先に立て、ダビデに近づいて来た。⁴²彼は見渡し、ダビデを認め、ダビデが血色の良い、姿の美しい少年だったので、侮った。⁴³このペリシテ人はダビデに言った。「わたしは犬か。杖を持って向かって来るのか。」そして、自分の神々によってダビデを呪い、⁴⁴更にダビデにこう言った。「さあ、米い。お前の肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう。」⁴⁵だが、ダビデもこのペリシテ人に言った。「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、わたしはお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。⁴⁶今日、主はお前をわたしの手に引き渡される。わたしは、お前を討ち、お前の首をはね、今日、ペリシテ軍のしかばねを空の鳥と地の獣に与えよう。全地はイスラエルに神がいますことを認めるだろう。⁴⁷主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される。」

⁴⁸ペリシテ人は身構え、ダビデに近づいて来た。ダビデも急ぎ、ペリシテ人に立ち向かうため戦いの場に走った。⁴⁹ダビデは袋に手を入れて小石を取り出すと、石投げ紐を使って飛ばし、ペリシテ人の額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。⁵⁰ダビデは石投げ紐と石一つでこのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には剣もなかった。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二6章1~10節

¹わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にははいけません。²なぜなら、

「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。³わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、⁴あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、⁵鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、⁶純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、⁷真理の言葉、神の力によってそうしています。左右の手に義の武器を持ち、⁸栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。わたしたちは人を欺いているようであり、誠実であり、⁹人に知られていないようであり、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはならず、¹⁰悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。

【福音書日課】マルコによる福音書9章14~29節

¹⁴一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。¹⁵群衆は皆、イエスを見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。¹⁶イエスが、「何を議論しているのか」とお尋ねになると、¹⁷群衆の中のある者が答えた。「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。¹⁸霊がこの子に取りつくくと、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださいとお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」¹⁹イエスはお答えになった。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならぬのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」²⁰人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。²¹イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。」²²霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」²³イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」²⁴その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」²⁵イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものも言わず、耳も聞こえさせない霊、わたしの命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。」²⁶すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。その子は死んだようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。²⁷しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。²⁸イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。²⁹イエスは、「この種のもの、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記上 17章(32～37節)38～50節

32ダビデはサウルに言った。「あの男のことで、誰も気落ちしてはなりません。あなたの僕が行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」33サウルはダビデに言った。「お前が出て行って、あのペリシテ人と戦うことなどできない。お前は少年だし、彼は少年のときからの戦士なのだ。」34しかしダビデはサウルに言った。「あなたの僕は、父の羊を飼う者です。ライオンや熊が出て来て、群れの中から羊を奪うこともあります。35その時は追いかけて打ちかかり、その口から羊を取り戻します。向かって来れば、たてがみをつかみ、打ち殺してしまいます。36僕はライオンも熊も打つ殺してきました。ですから、あの無割礼のペリシテ人もあの獣のようにしてみせます。生ける神の戦列を嘲笑ったのですから。」37ダビデはさらに言った。「ライオンの手、熊の手から私を救い出してくださった主は、あのペリシテ人の手からも、私を救い出してください。」サウルはダビデに言った。「行くがよい。主がお前と共におられるように。」38サウルは、ダビデに自分の装束を着せ、青銅の兜をその頭に載せ、身には鎧を着けさせた。39ダビデはその装束の上にサウルの剣を帯びて歩いてみた。だが彼はこれらのものに慣れていなかった。ダビデはサウルに言った。「こんなものを着たのでは、歩くこともできません。慣れていませんから。」ダビデはそれらを脱ぎ去ると、40自分の杖を手にとった。そして川岸で滑らかな石を五つ選び、身に着けていた羊飼いの袋に入れ、石投げを手にして、あのペリシテ人に近寄った。

41ペリシテ人は、盾持ちを先に立て、一步一步ダビデに近づいて来た。42彼は眼を据えてダビデを見たが、ダビデが容姿端麗で血色の良い少年だったので侮った。43そのペリシテ人はダビデに言った。「私は犬か。杖を持って私に向かって来るとは。」そして自分の神々によってダビデを呪い、44ダビデに言った。「さあ掛かって来い。お前の肉を空の鳥、野の獣にくれてやろう。」45ダビデはそのペリシテ人に言った。「お前は剣や槍や投げ槍で私に向かって来るが、私はお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によって、お前に立ち向かう。46今日、主はお前を私の手に渡される。私はお前を討ち、その首をはね、今日、ペリシテ軍の屍を空の鳥と地の獣に与える。全地はイスラエルに神がおられることを知るだろう。47主が救いを賜うのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主の戦いである。主はお前たちを我々の手に渡される。」

48すると、そのペリシテ人は立ち上がり、ダビデと戦おうとして近づいて来た。ダビデはすぐさまそのペリシテ人に立ち向かうため戦いの場に走った。49ダビデは袋に手を入れて石を取り出すと、石投げひもを使ってペリシテ人目がけて飛ばし、その額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。50こうしてダビデは石投げと一個の石でそのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には一振りの剣もなかった。

コリントの信徒への手紙二 6章1～10節

1私たちはまた、神と共に働く者として勧めます。神の恵みをいたずらに受けてはなりません。2なぜなら、「私は恵みの時に、あなたに応え救いの日に、あなたを助けた」

と神は言っておられるからです。今こそ、恵みの時〔別訳→好ましい時〕、今こそ、救いの目です。3私たちは、この奉仕の務めについて、とやかく言われないように、どんなことにも人につまずきを与えず、4あらゆる場合に自分に神に仕える者として推薦しているのです。大いなる忍耐をもって、苦難、困窮、行き詰まりにあっても、5鞭打ち、投獄、騒乱、労苦、不眠、空腹にあっても、6純潔、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛によって、7真理の言葉、神の力によってそうしています。また、左右の手に持った義の武器によって、8栄誉を受けるときも、侮辱を受けるときも、不評を買うときも、好評を博するときにも、そうしているのです。私たちは人を欺いているようであり、真実であり、9人に知られていないようであり、よく知られ、死にかけているようであり、こうして生きており、懲らしめを受けているようであり、殺さず、10悲しんでいるようであり、常に喜び、貧しいようであり、多くの人を富ませ、何も持たないようであり、すべてのものを所有しています。

マルコによる福音書 9章14～29節

14一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。15群衆は皆、イエスを見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。16イエスが、「何を議論しているのか」とお尋ねになると、17群衆の一人が答えた。「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。18霊がこの子を襲うと、所構わず引き倒すのです。すると、この子は泡を吹き、歯ざしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してください。」19イエスは答えになった。「なんと不信仰な時代なのか。いつまで私はあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子を私のところに連れて来なさい。」20人々はその子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子に癡癲を起させた。その子は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った。21イエスは父親に、「いつからこうなったのか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。22霊は息子を滅ぼそうとして、何度も息子を火の中や水の中に投げ込みました。もしできますなら、私どもを憐れんでお助けください。」23イエスは言われた。「『もしできるなら』と言うのか。信じる者には何でもできる。」24その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のない私をお助けください。」25イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものを言わず、耳も聞かせない霊。私の命令だ。この子から出て行け。二度と入って来な。」26すると、霊は叫び声を上げ、ひどく癡癲を起こさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。27しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。28イエスが家に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、私たちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。29イエスは、「この種のものには、祈り〔異本→祈りと断食〕によらなければ追い出すことはできないのだ」と言われた。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・7月31日「聖霊降臨節第9主日」の日課主題は「神による完全な武器」。「旧約聖書」には、「戦う神」のイメージが伴う。古代オリエント世界の宗教集団は、しばしば世俗権力と結びつき、あるいは対峙してきたため、軍事的勝利をもたらす「戦う神」という宗教表象が多用されてきた。キリスト教史においても、4世紀、コンスタンティヌス帝が政敵マクセンティウスとの戦い(312年ミルウィウス橋の戦い)に際して、前夜啓示により示された「キーロー十字架(XPを組み合わせた十字架)」を軍旗に用いて勝利したことが翌年のキリスト教公認(313年ミラノ勅令)に影響したとの伝説を始め、中世十字軍など、神を「戦争を勝利に導く神」として位置づけてきた歴史がある。

・旧約聖書日課は、「サムエル記」から、イスラエルの対ペリシテ戦争に際して少年ダビデが敵軍勇士ゴリアトを一騎打ちをし、石投げ紐と石のみの武器で勝利したとの英雄譚を伝える箇所の一部。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、「和解の福音」を託された者としての生き方をパウロが自身の生き方から示そうとする箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、弟子たちが癒すことのできなかった霊に取りつかれた子を主イエスが癒された逸話箇所。

旧約日課(サムエル上 17章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典「前の預言者」の三番目に置かれた「王国草創物語」で、預言者サムエルの指導により、初めにサウルが、次いでダビデが王に立てられたことを物語る。便宜上、上下巻に分けられており、上巻はサウル王の時代、下巻はダビデ王の時代に相当する。「サムエル記」において、ダビデは、サウル王の家臣の一人として登場し、サウル王が戦死するまで忠臣の立場を崩さなかった者として描かれ、サウル王の死後はじめて、自身の属するユダ族の王として立てられた者として描かれる。しかし、「サムエル記」の叙述を紐解くならば、実際には、もう少し血なまぐさい抗争が背景にあったことを見過ごすわけにはいかない。サウルは、ベニヤミン族出身の軍事指導者として登場し、おもに北部地域の諸部族を後ろ盾に王として統治する。このサウル王の時代描写の中で、ユダ族だけは別扱いで描かれることが少なくない。おそらく、北部諸部族とユダ族とは、元来、異なる歴史的背景を有していたと考えられ、サウル王のもとでユダ族は、属国に近い立場で支配を受けていたものと推察される。これが、ユダ族を代表するダビデに対する、サウル王の不可解な処遇の理由であろう。ダビデは、家臣としてサウル王の軍隊を率いて戦争に勝利し民の支持を得るが、それを妬んだサウロにダビデは遠ざけられたという逸話(サム上 18章以下)なども、本来は王自らが最前線で戦うことが王としての権威を高めるほぼ唯一の手段であったという古代オリエント

世界の時代背景を鑑みれば、敢えてサウル王は自分が前線に赴かずに困難な戦闘が予想される最前線にダビデを司令官として派遣したにもかかわらず、王の期待に反してダビデは戦闘を勝ち抜き、勝利の凱旋をしたことが、王の計算違いであったと考えられるのである(王が、排除したい家臣にこのような手を使うことは、ダビデが王として横恋慕したバト・シェバの夫ウリヤを激戦地の最前線に赴かせて戦死させた逸話からも、常套手段であったことが分かる。サム下 11章)。サウル王と王子ヨナタンの戦死によって支配が揺らいだ機会にサウル王家の支配から脱したユダ族は、盟主ダビデを王として独立を宣言、7年後には北部諸部族もサウル王家を見限ってダビデを王として戴くことに至ったのである(サム下 2~5章)。

・ダビデは、ユダ族の歴史において英雄的な存在であり、さまざまな英雄譚が語り継がれていたと考えられる。サウル王の支配に屈していた時代の逸話も、実際に起こっていたことをありのまま語り継ぐというよりも、ダビデがいかにか英雄的な振る舞いをした人物であったかという演出を伴って、語り継がれていたと考えられる。英雄譚に少年時代の逸話は付きものである。日課箇所の逸話と、直前に置かれた「竖琴使い」としてサウル王に召し上げられる逸話は、並べると多少矛盾を生じるにもかかわらず、よく知られた少年ダビデの英雄譚として、ここに置かれたのだろう。

・ペリシテ人は、カナン地方の地中海沿岸に都市を形成した「海の民」と呼ばれる人々の総称。「海の民」自体は、より広い概念で、前12世紀頃にその航海術で地中海周辺に大きな社会変化をもたらした人々と考えられている。フェニキア人やカナン人を「海の民」に数える場合もある。また、イスラエル十二部族に数えられるダン族は「海の民」との関係性を推認されることがあり、『聖書』中で特にペリシテ人との敵対関係が強調されている(士師記 17~18章など参照)。ローマ帝国時代、紀元130年代のバル・コクバの乱を経て「ユダヤ属州」が「シリア・パレスティナ属州」に改名されたが、これは、イスラエルの仇敵ペリシテの名を充てたもの。

使徒書日課(IIコリント6章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、使徒パウロが自ら創設に関わったコリント教会に宛てて書き送った一連の書簡の一つ。コリント教会は、パウロがユダヤ人夫妻アキラとプリスキラと共に立ち上げたとされるが(使徒 18章)、その後、アポロやペトロ(ケファ)など、さまざまな指導者の影響下に置かれ、ローマ教会との関係が深かったとされる。これは、アキラとプリスキラが元々ローマに拠点を持っていたことによるのかもしれない。創設初期の成果は目覚ましかったと思われ、パウロの宣教活動の中では随一の成功例と考えられるが、同地を離れた後は、必ずしもコントロールが効かなくなっていったのであろう。コリント教会の中でパウロを指導者と仰ぐ者たちがパウロに助言を求めて書

簡のやり取りが行われるようになり、多くのコリント教会宛の書簡がパウロによって執筆されたと推認される。「新約聖書」に収められている二つの手紙は、その多数の書簡の中の一部と考えられる。

・「手紙一」では、もっぱらコリント教会に対する指導者然とした姿勢で筆を進めるパウロが、「手紙二」では、相互に受け入れ合い和解が必要な者として低姿勢で筆を進めている。日課箇所は、その姿勢を、福音に基づく必然として提示(5章)した後に、自分自身がどのような生き方をしてこの姿勢に徹してきたかを示そうと、ある種の自伝的叙述を重ねている。

・2節はイザヤ 49:8の引用。

福音書日課(マルコ 9章より)

・日課箇所は、主イエスが三人の弟子たちだけを連れて高い山に上られている間に、残された弟子たちが霊に取りつかれた子の癒しを求められながらうまくできず、そこに山から戻って来られた主イエスが現れてその子の癒しをされるという逸話を伝える。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)は、「ペトロの信仰告白」～「死と復活の予告」～「高い山での変貌」～「霊に取りつかれた子を癒す」～「再び死と復活の予告」というまとまりを保存して伝えており、さらに続く箇所に置かれる「弟子たちの論争」までを一つの伝承単位として認識していたと考えられる。ただし、日課箇所の逸話を、マタイとルカはマルコに比べておよそ半分の文字数で簡略化して伝えており、マルコには独自性がある。

・日課箇所は、(マタイ、ルカと異なり)残されていた弟子たちが律法学者たちと議論をしている状況を場面設定としている。この場面設定は、「霊に取りつかれた者の癒し」に関する議論が実際に起こっていたことを示しているのだろう。弟子たちに癒しができなかった理由は、最後の問答で示され、「祈り」が鍵語として残される形で逸話は閉じられている。「霊からの癒し」の問題は「祈り」の問題の中で問われる、というのだろう。

・日課箇所中に、「霊」の訳語は 9 回現れるが、実際に「霊(プネウマ)」の語が用いられているのは 4 回のみである(17 節、20 節、25 節×2)。この中で、一度だけ「汚れた(アカタールトス)」が付されているが、残りは単に「霊」とされている。これをすべて単純に「汚れた霊」と同じものとみなしてよいかは、疑問が残る。

来週の誕生日 (7月31日～8月6日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-4番「世にあるかぎりの」(= I 62)は、C.ウェスレー(18世紀英国)の代表的な讚美歌で、彼が自身の回心経験を記念して作詞した。メソジスト歌集のみならず多くの教派歌集で採用されている。曲は、19世紀初めにドイツで活躍した音楽家 C.G.グレーザーの曲を19世紀米国の教会音楽家 L.メーソンが編曲したもの。1954年版の曲は日本版独自のもの。

・21-509番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966年夏の異常な猛暑の中で着想された。

・21-453番「何ひとつ持たないで」、現代オランダの元カトリック司祭で独立教会「エクレジア」を主宰する H.オースターハウスの作詞したオランダ語歌詞。曲は、カトリック司祭 B.M.ハウベルスがこの歌詞のために作曲。

21-4「世にあるかぎりの」

O for a thousand tongues to sing

1. Oh, for a thousand tongues to sing / My great Redeemer's praise, / The glories of my God and King, / The triumphs of his grace!
2. My gracious Master and my God, / Assist me to proclaim, / To spread through all the earth abroad, / The honors of your name.
3. The name of Jesus calms our fears / And bids our sorrows cease, / 'Tis music in the sinners ears; / 'Tis life and health and peace.
4. He breaks the pow'r of canceled sin; / He sets the pris'ner free. / His blood can make the foulest clean; / His blood avails for me.
5. See all your sins on Jesus laid; / The Lamb of God was slain. / His life was once an offering made / That you might live again.
6. Glory to God and praise and love / Be ever, ever giv'n / By saints below and saints above, / The Church in earth and heav'n.

21-509「光の子になるため」

I want to walk as a child of the light

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus. / God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.
- [Refrain] In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.
2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus. / Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.
 3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus. / When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.

21-453「何ひとつ持たないで」

Ik sta voor U

1. Ik sta voor U in leegte en gemis, / vreemd is uw naam, onvindbaar zijn uw wegen. / Zijt Gij mijn God, sinds mensenheugenis, / dood is mijn lot, hebt Gij geen and're zegen? / Zijt Gij de God bij wie mijn toekomst is? / Heer, ik geloof, waarom staat Gij mij tegen?
2. Mijn dagen zijn door twijfel overmand, / ik ben gevangen in mijn onvermogen. / Hebt Gij mijn naam geschreven in uw hand, / zult Gij mij bergen in uw mededogen? / Mag ik nog levend wonen in uw land, / mag ik nog eenmaal zien met nieuwe ogen?
3. Spreekt Gij het woord dat mij vertroosting geeft / dat mij bevrijdt en opneemt in uw vrede. / Open die wereld die geen einde heeft, / wil alle liefde aan uw zoon besteden. / Wees Gij vandaag mijn brood zowaar Gij leeft. / Gij zijt toch zelf de ziel van mijn gebeden.